

氏 名	橋本 周子
学 位 の 種 類	修士 (看護学)
学 位 記 番 号	修士第 262 号
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 3 条第 1 項
学 位 授 与 年 月 日	令和 4 年 3 月 1 0 日
学 位 論 文 題 目	終末期にあるがん患者の心と向き合う看護師の経験
審 査 委 員	主査 桑田 弘美 副査 相見 良成 副査 辻村 真由子

論文内容要旨

※整理番号	267	(ふりがな) 氏名	はしもと ちかこ 橋本 周子
修士論文題目	終末期にあるがん患者の心と向き合う看護師の経験		
研究の目的			
本研究の目的は、終末期にあるがん患者をケアする看護師の経験について明らかにすることである。			
研究方法			
現象学的方法に基づき研究を実施した。終末期がん看護に携わる看護師経験年数が5年以上の看護師6名に対し、終末期にあるがん患者と向き合う経験について、半構造化面接を行った。データ収集期間は令和3年5月～8月。インタビューデータはColaizziの分析方法を用いた。			
結果			
看護師6名(計12回)のインタビューを通して、終末期がん看護における看護師の経験に関する意味単位は、236個抽出された。ここから、7個の大テーマ【看護師という責任と使命感をもち死に向かう患者を支える】、【患者と看護師の両者を生きる】、【患者の世界にいる】、【揺れ動く患者の心を支援する難しさを経験する】、【終末期にある患者の看護に対するモチベーションを維持する】、【スタッフに支えられ患者に向かう】、【自身の看護実践の実感(手応え)が得られない】と23個の小テーマが構築された。			
考察			
終末期にあるがん患者と向き合う看護師は、二つの文脈をもつことが考えられた。一つは患者の世界という文脈で患者と一体になり患者の見えている「死」について見る文脈、一つは看護師・医療者の世界という文脈で看護師としての責任と使命感をもち患者を支える文脈であり、看護師はこの両方の世界の重なる部分に居ることが考えられた。看護師は、患者の生命の維持という医療の安全性を重視しながら苦痛の緩和に向けて緊張感の高い看護を提供すると同時に、不安や恐怖を感じる患者と一体になり患者の世界を可能な限り理解しており、求められるケアもスピード感も異なる両者の文脈を移行する葛藤や難しさを経験していると考えられた。また、患者と看護師の関係について、大テーマ【患者の世界にいる】の中で三つの側面があると考えられた。一つ目は看護師が患者に関心を向け患者の世界の外から患者を捉え理解する関係、二つ目は患者と相互作用の中で関係を築く関係、三つ目は患者と別の世界にいる看護師が、患者の世界に入り込み患者と一体感を持ち、共に死を見るつめる関係である。対象者は全ての側面、若しくはいずれかの側面を経験していると考えられた。			
総括			
終末期にあるがん患者の心と向き合う看護師は、死に向かう患者と一体になり患者の世界を共にする文脈と、看護師として生命の維持や安全を守るという役割や責任をもつ看護師・医療者の世界という文脈の二つをもち、患者の心と両者の文脈を行き来することに、さらにその中で自分の価値観とをすり合わせつつ患者の思いを理解しようとしていることが明らかになった。看護師の成長を支えるためには、このような治療の先にある患者が死を見ていくことを支えるという看護師の役割を理解し、その看護師を多職種チームがさらに支えていることを看護師が感じられる環境づくりが必要であると考えられた。			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1,200字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。